



TITLE:

本を伝える一高山寺本と修復：平成 27年度京都大学図書館機構貴重書 公開展示図録

AUTHOR(S):

大槻, 信; 小林, 雄一; 岡村, 弘樹

CITATION:

大槻, 信 ...[et al]. 本を伝える一高山寺本と修復：平成27年度京都大学図書館機構貴重書公開展示図録. 2015

ISSUE DATE:

2015-10-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/200755>

RIGHT:



宋景聲譯

安如... 成氏樹給

本を伝える

高山寺本と修復

青蓮藏本

平成二十七年京都大学図書館機構貴重書公開展示図録

諸州... 或抄三出中華採無時
山人説

毘輪之北雪山之巔多生此草所謂吉祥草

草草芽是也當朝雖有其草其意不似彼

者也

忍辱草

時... 有

雪山有草名忍辱草石食者其味酸

俞正道居於此道所見伴此草宜一草

圓意不歷四味所成醍醐信此類成漸

圓等之仁

西城記... 摩揭陀國上

菩提樹南不遠有華堵波寫百八人無

憂王之所達也菩薩所入此門時

菩提樹竊自推念何以名座尋自發明

當頭淨草天帝釋化其身為刈草人

荷而送路菩薩謂目下若之草頭毗東

耶此八同命恭以草奉菩薩受已執

前進

同記

菩提樹恒內四隅皆有大華堵波在昔如

目次

ごあいさつ(京都大学図書館機構長 引原隆士)

本を伝える——高山寺本と修復

総説

1

解題

8

谷村文庫について

24

貴重書修復について

25

修復資料一覧

27



ごあいさつ

京都大学図書館機構では、過去の実績を踏まえ、2009年以降2年に1回秋季に展示会を開催しております。その主旨は、京都大学が所蔵する貴重な資料を学内外に公開し、広く市民の方々にも親しんで頂く機会を持つていただくことにあります。本年は、本学が所蔵する「高山寺本」を取り上げ、同時に図書館機構による貴重資料修復事業の成果を紹介する展示を企画致しました。高山寺は「鳥獣人物戯画」で知られている京都梶尾の古刹です。高山寺は中世以降にさまざまな典籍を収集し、書写し、目録をまとめ、図書館の原点とも言える本の継承に努めてきたことで知られています。京都大学が寄贈などを受けて高山寺の旧蔵古典籍「薬字抄」（附属図書館蔵）、「大乘華嚴経略策」（人文科学研究所蔵）などを所蔵しております。今回修復なった資料とその関連資料から、高山寺本の資料の貴重な内容の一端を垣間見ることが出来ます。同時に、修復という事業の重要性を、現在進行中の事業に関する展示を通してご理解頂ける良い機会と考えております。是非、企画致しました展示を楽しんで頂ければ幸いです。

本展示会の開催に当たり、監修を本学文学研究科大槻信教授にお願い致しました。この場を借りてご協力とご努力に御礼申し上げます。解題の作成は、小林雄一氏、岡村弘樹氏にご協力を頂きました。ご協力に御礼申し上げます。また、各展示項目の解説にご協力頂いた職員の皆様にも感謝致します。会場として京都大学文書館企画展示室をお借り致しました。ここでは他に京都大学の歴史展示と共に、各部局で研究用に所蔵された貴重書も合わせてご覧頂けます。この機会に是非ともご覧下さい。

では、どうぞ展示会をお楽しみ下さい。

平成27年10月

京都大学図書館機構長 引原隆士

本を伝える

—高山寺本と修復

総説

大槻 信

■本を伝える

寺院などに蔵書の整理・調査にうかがうと、蔵書の大半が江戸時代以降のものであることが多い。歴史のある大寺院でも、江戸時代をさかのぼる本は極端に少ない。江戸時代の本よりも室町時代の本は少なく、室町時代の本よりも鎌倉時代の本はさらに少ない。平安時代の本はただで希少価値があり、奈良時代以前のものとなるとほとんどお目にかかれない。一般に、鎌倉時代以前の本が現存することはきわめてまれである。

それは、一つには、時代をさかのぼるほど、生み出された書物の総量が少なくなるからである。加えて、長い時間を経るほど「もの」は残りにくくなる。時間が経過すればそれだけ、その間に失われる確率は高くなる。生み出されてから千年間、ずっと守り伝えられなければ残らない平安時代の本に比べて、つい一五〇年前まで続いていた江戸時代の本がより多く残るのは当然であろう。一冊の本は、戦乱・火事・水害・虫損・損壊・遺棄など、あらゆる

る、災禍の全てから逃れて、ようやく現在まで残るのである。一方、閲覧者のちよつとした不注意でさえ、本を損なうには十分である。本は簡単に損なわれ、容易に元には戻せない。

このように、本を伝えていくことはきわめて難しい。本のような「もの」はさまざまな要因で損なわれていくのが普通であり、それに抗うためには意識的な努力を要する。

■整理と修理

本は、一冊一冊がそれぞれに価値を持つと同時に、それらがライブラリーという集合体を成すことにより、単なる足し算以上の価値を持つ。図書館では、ある選定基準を満たした本がまとまって存在していることに価値があり、それらが秩序だつて配架されていればこそ、知的リソースとして力を発揮する。「蔵書」という書物の集合体は、それらを常に整理し、管理することがなければ、十分に機能しない。蔵書が活きたものとなるためには、集書、目録作り、貸出管理、インスペクションといった整理事業を繰り返す必要がある。

このように、蔵書を維持していくためには、整理と修理が欠かせない。整理しなければ、多くの本を管理することも、使いこなすこともできない。修理しなければ、本は次第に古びて失われていく。適宜リストを作り、適切な補修を加えていくこと。そして、その作業を不断に継続することが必要なのである。

先に述べたように、古い本は残らない方が普通である。蔵書という複雑なシステムも、放っておくとどんどん崩壊していく。それを食い止めるためには、積極的な努力が必要になる。

しかし、その努力は表面上、現状維持にしか見えないため、通常あまり高く評価されない。地味で目立たず、重要性が認識されにくい。そのため、蔵書維持の努力は、時代が世知辛くなると切り捨てられやすい。社会的、文化的に余裕がないと、メンテナンスはあともわしにされがちなのである。（電子ジャーナルに予算の大部分を割かざるをえない現在の大学図書館では一層そうである。古典籍の整理や修復に高い意識を持つてのぞむ京都大学は、残念ながら、希有なケースである。）

しかしながら、いったん蔵書を維持するための努力を怠ると、後から元の状態に戻すことはほとんど不可能になる。ひとたび損なわれると取り返しがつかない。蔵書の整理と修理は、派手さはないがきわめて重要で、常に欠くことができない営為なのである。

■高山寺本

この展示で取り上げようとする高山寺本は、後述するように、その蔵書の多くが平安時代・鎌倉時代に書写されたものである。それだけでも、きわめて異色であることがわかる。なぜそのようなことが起きたのだろうか。

幕末に高山寺近くに逗留し、しばしば高山寺を訪れた僧願海は、高山寺を次のように描写している（『願海書志』）。

最近世間一般、僧も俗人も志が薄くなってしまった。相伝するものであつても、自分が好まないものは、祖先の思いも何も考慮せず、売り払ってしまう風潮である。それに反して、この山の人々は、一山の力をあつめ、絶えてしまったものを継ぎ、廃れたものを興そうとしている。

その護法の深志、まことに尊ぶべきである。（原文「此節ハ世界一般真俗トモニ、志シウスク也、相傳スル処ノモノマデモ、己レ所不好モノハ、祖先ノ思召モナニモ思ハテ、賣却スル風俗ナルニ、此ノ山ノ人々其レニ反シ、一山戮力、繼絶興廢、ソノ護法ノ深志、可尊」）

願海が言う通り、高山寺においては、その蔵書を整理し、修復し、次の世代へつないでいくための努力が、長年にわたり営々と続けられてきた。それによって、多くの古い書物が現在に残されたのである。現代に生きる我々は、それらをまた後代に伝えていくつとめがあるであろう。

■高山寺

昨年（2014年）秋に京都国立博物館で開催された特別展「国宝 鳥獣戯画と高山寺」が二十万人超の入場者を集めたことは記憶に新しい。

高山寺は京都市右京区梅尾（しがのお）にある古刹である。一般には秋の紅葉と鳥獣人物戯画、華嚴宗祖師絵伝などによって知られている。創建は奈良時代に遡るともいわれ、その後、高尾神護寺の別院であったのが、建永元年（1206）、明恵房高弁（1173 - 1232）が後鳥羽上皇よりその寺域を賜り、名を高山寺として再興した。



[上]伝後鳥羽院宸翰の勅額

[下]明恵上人樹上坐禅像（複製）

高山寺には国の指定文化財として、国宝8件（石水院、仏眼仏母像、明恵上人樹上坐禅像、華嚴宗祖師絵伝、鳥獣人物戯画、篆隸万象名義、玉篇卷第二十七、冥報記）、重要文化財50余件がある。重文「高山寺典籍文書類」は一括指定であり、それだけで9000点以上に及ぶことからもちろなり、膨大な数の文化財を蔵している。

■高山寺の典籍

高山寺は中世以来の学問寺として知られる。収蔵する典籍が質量を兼備した一大コレクションであることから、経蔵本は「高山寺本」としてつとに名高い。その多くが現在まで同寺に伝来し、収蔵の典籍文書のすべてが重要文化財に指定されている（国宝指定を含む）。

景物や美術品の集積としての高山寺もたしかに魅力的である。しかし、真の文化的価値は「継承される学問寺」としての高山寺にある。そして、その中核をなしたのが高山寺が蔵する書物群であった。「高山寺本」こそが、高山寺を高山寺たらしめてきたのである。

修学につとめた明恵と高弟たち、さらにはそれを庇護する者たちによって、高山寺には膨大な数の典籍が集積された。平安時代、鎌倉時代に書写されたものを中心に、古く中国の唐代写本、日本の奈良朝写経も含み、宋代の版本もある。内容は内典（仏教関係書）を核に、外典、小学書、一部和書にまで及ぶ。中世において高山寺経蔵は国内有数の巨大図書館として機能していた。

現在高山寺に残る典籍の総数はおよそ11500点。そのうち平安時代の書写にかかるものが2500点、鎌倉時代が6000点、室町・江戸時代が3000点と概算される。平安時代の写本は他所で写され、鎌倉時代以降に高山寺へもたらされたものである。明恵と高弟たちが活躍した鎌倉時代の典籍が経蔵の中心であることは、その数によっても明らかである。室町・江戸時代には、転写、修理、目録作成などによって、典籍類を後に伝えた。中でも、江戸初期の顕証（1597・1678）と江戸末期の慧友（1775・1853）の名を逸することはできない。高山寺本が現在に伝えられたのは、彼等が整理と修復を続けたからに他ならない。



[右上] 石水院庇の間

[左上] 高山寺境内

[右下] 国宝『鳥獣人物戯画』甲巻（複製）

[左下] 石水院南縁からの風景



■高山寺の目録

「学問寺」としての伝統を最もよく示すのが古目録の存在である。高山寺では、鎌倉時代以降たびたび経蔵の整理・調査が行われた。その整理に伴って、種々の経蔵目録が作成され、また、典籍の表紙に経蔵名・函番号などが記入された。有名な「高山寺」朱印の押印も整理作業の一環である。

奥田勲「高山寺経蔵とその古目録について」（『高山寺経蔵古目録』1985年）、宮澤俊雅「高山寺経蔵とその古目録について」（『続高山寺経蔵古目録』2002年）によって、高山寺経蔵の歴史と目録との対応を見てみよう。

I 高山寺草創期には、東西二字の経蔵があった。東経蔵には一切経一部、大般若経一部、真言書十二合等を収蔵し、西経蔵には唐本一切経一部、五部大乘経一部、大般若経一部、章疏等百合等を収蔵していた。

II 明恵没後二十年を経た建長年間（1249・56）にこの経蔵の調査・整理が行われた。その際に作成された目録が、

a 『高山寺聖教目録』（建長二（1250）年。『高山寺経蔵古目録』所収。）

b 『高山寺経蔵聖教内真言書目録』（建長三（1251）年。『高山寺経蔵古目録』所収。）

である。後者は真言関係書を、前者はそれ以外を集録している。

III 東西経蔵以外にも、法鼓臺道場（高山寺内の説法所）に収蔵された聖教があり、その目録が、

c 『法鼓臺聖教目録』（鎌倉時代中期。『高山寺経蔵古目録』所収。）である。以上が建長・文永期の第一次収蔵体系である。

IV それ以降、鎌倉・室町時代に、経蔵の変更や、房舎の変転があった。

まず、経蔵自体が東西二字から石水院経蔵にまとめられ、法鼓臺聖教も石水院経蔵やその他の僧房に移された（他に、十無盡院・善財院・賢首院・地蔵院・報恩院・三尊院等の寺内子院に経蔵ないし蔵書があった）。

V 特に、室町期まで高山寺の中核をなした方便智院（定真開基）には、明恵、定真以下歴代の書冊が集積された。方便智院の収蔵目録が、d 『方便智院聖教目録』（文明一六（1484）年以降。『続高山寺経蔵古目録』所収。）である。

VI 第二次の収蔵整理は寛永年間（1624・44）に始まる。石水院経蔵を顕・密の二室に分け、顕経蔵には『高山寺聖教目録』収載分を収め、密経蔵には『高山寺経蔵聖教内真言書目録』掲載書を中心とする真言書、ならびに法鼓臺聖教、方便智院聖教が収められた。

VII 寛永期の整理で各聖教に経蔵名と箱番号が記された。〈顕経蔵〉所蔵分には「甲」「乙」を付し、〈密経蔵〉所蔵分には「真」（真言書）、「臺」（法鼓臺）、「東」（東坊方便智院）を付した。

VIII 江戸時代享保（1716・36）頃、石水院経蔵の聖教全てが開山堂奥の二階建の土蔵に移された。

IX 昭和三四（1959）年、収蔵庫（法鼓台文庫）が造営され、全ての聖教が収納された。

VII からわかるように、表紙に「甲」「乙」とあればa『高山寺聖教目録』に記載されている可能性が高く、「真」とあればb『高山寺経蔵聖教内真言書目録』に、「臺」とあればc『法鼓臺聖教目録』に、「東」とあればd

『方便智院聖教目録』にそれぞれ掲載されていると考えてよい。それに続く数字は箱番号をあらわす（解題⑤参照）。このように、高山寺本については、目録によって過去と現在の本とを突き合わせることが可能なのである。高山寺から山外へ出た本についても、目録上のどの本なのか推測可能であることが多い。

このような経蔵維持のための努力と学問の継続があればこそ、多くの典籍は今に伝えられた。典籍に代表される寺宝は、明恵に対する崇敬を核として、営々と護持されたからこそ現在に残っているのである。その努力は住持・寺僧が中心となって現在まで続いている。中でも特筆すべきは、日本史学、国語学、国文学、仏教学の研究者が中心となって昭和四十三年に結成された高山寺典籍文書綜合調査団の存在である。十五年をかけて経蔵典籍・古文書の悉皆調査を行い、その成果を『高山寺典籍文書目録』（索引共全五冊、完結篇一冊）として公表した。現在の経蔵（収蔵庫）はその目録に対応した形で整理されている。調査団による調査は現在も継続されている。近年は京都大学の大学院生も、撮影補助という形で調査団に協力している。大学院生は、調査に協力しながら、同時に古い本について学ぶ貴重な機会を得ているのである。



高山寺調査風景



■京都大学所蔵の高山寺本

長い歴史の中、高山寺から山外に出た本もある。その高い価値から、蔵書家は競って高山寺本を求めた。「高山寺」印はそれだけで善本の証しであった。主たる文庫・コレクションには、必ず高山寺本が含まれていると言ってもよいほどである。国宝・重要文化財の指定を受けている山外本も少なくない。

京都大学が蔵する貴重書の中にも高山寺本を見ることができる。現在までに管見に及んだ高山寺旧蔵本として、以下の七点をあげることができる。

①四分律比丘含注戒本 谷村文庫 123ニシ6貴
三帖、折本装、巻首「高山寺」朱印、上巻巻尾「錢塘洪先刀」、覆
宋版

②成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌 谷村文庫 123ニシ7貴

一卷、尾欠、卷子本、「高山寺」朱印、平安時代後期写

③佛説八關齋經 谷村文庫 123ニハ1貴

一帖、折本装、巻首「高山寺」朱印、紹興三十年跋刊（南宋1160）

④梵網經盧舍那仏説心地法門品菩薩戒本 谷村文庫 123ニホ1貴

一帖、折本装、巻首・巻尾「高山寺」朱印、北宋版

⑤曼荼羅次第法（高尾口決） 谷村文庫 126ニマ1貴

一帖、粘葉装、巻首「高山寺」朱印、鎌倉時代建久四年写、外題
「高尾」

⑥葉字抄（香字抄） 京都大学附属図書館 702ニヤ1貴別

一卷（巻三）、卷子本、首わずかに欠、巻首紙背「真第九箱」

（朱）、巻首「高山寺」朱印、外題「真第九箱／葉字抄 高山

寺」、院政期写

⑦大乘華嚴經略策 附入法界十八問答、華嚴講主自問自答 京都大

学人文科学研究所 松本文庫 松本1932

一帖、折本装、首欠、「高山寺」朱印、鎌倉時代中期写

高山寺旧蔵本は谷村文庫に多く蔵されていることがわかる。谷村文庫
とは、故谷村一太郎氏の旧蔵書であり、氏が新村出博士と姻戚関係で

あったこともあって、氏の没後、昭和十七年に京都大学附属図書館に寄
贈されたものである。古写経を中心に貴重な典籍を多く含む（24頁
「谷村文庫について」参照）。

また、高山寺に關係する書として以下の三点がある。

⑧三部經傳受聞書 京都大学文学部 国文・寿岳文庫7C4

一冊、袋綴、原表紙裏「梅尾／善財院」、片仮名交り文、室町時代

応仁二年（1468）写

⑨高山寺圖像鈔目錄 京都大学附属図書館 120ニコ3貴

一冊、袋綴、巻首「高山寺」朱印、江戸時代中期写

⑩古写経断簡 谷村文庫 123ニコ5貴

一卷、卷子本、断簡（巻首・巻尾を欠く）、平安時代中期写

⑧は高山寺の寺内子院の一つ、善財院の旧蔵書である。⑨は書名に高
山寺をうたい、高山寺印もあるが、高山寺と関わない可能性が高い
（解題参照）。また、⑩は巻首裏に「此断簡是高山寺旧什寶佐々木山
城／守奉納大乘経也」とあるが、首尾欠で高山寺印もなく、高山寺旧蔵
を確認できない。

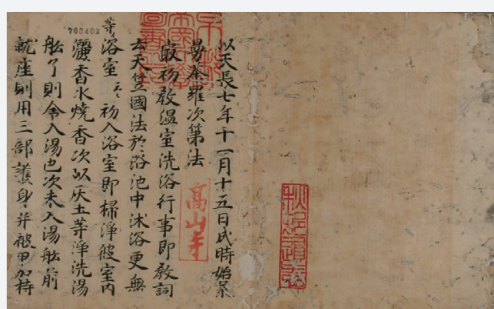
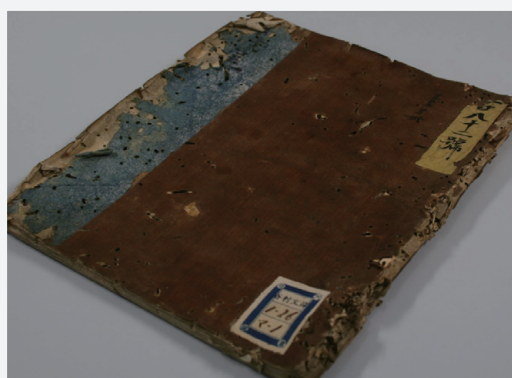
本展示はこれらのうち①～⑨を陳列し、あわせて京都大学における古
典籍修復について紹介するものである。今回の展示が「本を伝える」こ
との意味について考える機会となることを願っている。

—曼荼羅次第法（高尾口決）の修復前後—

（修復後）



（修復前）



■主要参考文献（年代順）

- 田中久夫 『明恵』（人物叢書）吉川弘文館 1961年
- 井上靖、葉上照澄 『高山寺』（古寺巡礼 京都15）淡交社 1977年
- 奥田勲 『明恵 遍歴と夢』 東京大学出版会 1978年
- 京都国立博物館編 『明恵上人没後750年 高山寺展』 朝日新聞社 1981年
- 高山寺典籍文書総合調査団 『高山寺資料叢書』（全24冊、別巻1冊） 東京大学出版会・汲古書院 1971年～2007年、『高山寺経蔵古目録』 1985年、
- 『続高山寺経蔵古目録』 2002年
- 高山寺典籍文書総合調査団 『高山寺善本図録』 東京大学出版会 1988年
- 大槻信 「京都大学所蔵の高山寺本——書物と目録——」 静脩39（4） 2003年
- 小川千恵、阿川佐和子 『高山寺』（古寺巡礼 京都32） 淡交社 2009年
- 大槻信 「願海書志」 訓点語と訓点資料 127 2011年
- 京都国立博物館、朝日新聞社 『国宝 鳥獣戯画と高山寺』 2014年

解題

大槻
信

小林
雄一

岡村
弘樹

① 四分律比丘含注戒本

9

② 成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌

11

③ 佛說八關齋經

12

④ 梵網經盧舍那仏説心地法門品菩薩戒本

13

⑤ 曼荼羅次第法（高尾口決）

15

⑥ 藥字抄（香字抄）

17

⑦ 大乘華嚴經略策

附入法界十八問答、華嚴講主自問自答

19

⑧ 三部經傳受聞書

21

⑨ 高山寺図像鈔目錄

22

①四分律比丘含注戒本

道宣著 唐貞観四年(630) 三巻

京都大学附属図書館 谷村文庫二123ニシ6貴 三帖 折本装
楮紙 縹色無地表紙、表紙右肩「三巻之内」、表紙右下「青蓮蔵
本」 表紙見返「秋邨遺愛」朱印、巻首「高山寺」朱印、同「讀
社／艸堂」単廓方形朱印(明治時代の古書蒐集家、寺田望南の
印)、下巻末「高山寺」朱印(伝領識語に重ねて) 縦二七・四
糲×横一一・四糲 一紙四行×十八行、一行一七字、一折五行
墨界 界高二四・二糲、界幅二・三糲 上巻五八折、中巻五一
折、下巻三七折 外題・内題・尾題「四分律比丘含注戒本上
(中・下)」、小口書「含注戒本上(中・下)」

刊記「錢塘洪先刀」(上巻末) 奥書「傳領畢實助之」(墨書・
上中下巻末)、「慶安四八十六全部三巻修覆之畢 三学俱傳沙門
尊純之」(墨書・下巻末)

墨点(校合、仮名、合符、返点、声点(圈点)、朱点(句切))

四分律は出家者(比丘・比丘尼)の守るべき戒律を記した經典である。本書は、その四分律から男性の出家者(比丘)の守るべき条文を抜き出し、注を加えたものである。

本書の奥書には上中下巻ともに「傳領畢實助之」とあり、下巻のみ「實助之」の字の上から「高山寺」朱印が捺されている。朱点や仮名の書き込みは「實助」によるものと見られる。また、下巻末には別筆で

「慶安四八十六全部三巻修覆之畢 三学俱傳沙門尊純之」とあり、慶安四年(1651)に補修されたことが分かる。表紙の「青蓮蔵本」「三巻之内」の字は、虫損跡を補修した紙に掛かっており、これらの字は「尊純」によるものと考えられる。そして、「青蓮院」の「尊純」とは、青蓮院宮尊純法親王(1591・1653)であろう。

青蓮院には室町時代前期の大僧正「實助」がおり、青蓮院吉水蔵聖教の多くに伝領識語を残している。この實助が本書の實助と同一人物である可能性が高いだろう。その場合、高山寺印は青蓮院を出た後に捺されたと考えられるが、現在、高山寺の所蔵する典籍に青蓮院よりもたらされたものではなく、どのようにして本書が高山寺へと入ったのか、その経緯は詳らかではない。

本書は刊本であり、上巻末に彫師の記名「錢塘洪先刀」が刷られている。この「錢塘」は中国の地名であり、時期的に宋版と考えられるが、本書の紙質は宋版のものとは異なるため、宋版を日本で覆刻した覆宋版だと考えられる。本書と同じ版本(上巻のみ)が龍門文庫にあり、『龍門文庫善本書目』(川瀬一馬)によれば泉涌寺版であり、正安元年(1299)以前に製作されたものだとする。本書も泉涌寺版と考えてよいだろう。

(小林 雄一)

四分律比丘含注戒本序
太一山沙門釋道宣述
軌也自法王利見弘濟在緣程上聖之棲遑
悼小凡之沈溺故能闢不諱之門示秘密之
深術張無間之說顯初學之津途遂靜處而
興教源集衆而宣玄範前明由序廣陳發致
之功後列大宗盛羅機欲所被約時敷演通
行於是承遵合索等聞正法由茲久住但以
時來不競情變所流經陳夢疊之徵律舒分
杖之喻致使教隨文結理任情移雲飛二部
五部之殊山張十八五百之異取其元始所
被無非計情窮其要會之心俱通正業逮乎
曹魏之末戒本創傳終於隋運之初芟改者
衆或依梵本或寫諫文或以義求或以據

戒淨有智慧 便得第一道 如過去諸佛
及以未來者 現在諸世尊 能勝一切憂
皆共尊敬戒 此是諸佛法 若有自爲身
欲求於佛道 當尊重正法 此是諸佛教
七佛爲世尊 滅除諸結使 說是七戒經
諸縛得解脫 已入於涅槃 諸戲永滅盡
尊行大仙說 聖賢辨善戒 弟子之所行
入寂滅涅槃 世尊涅槃時 興起於大悲
集諸比丘衆 與如是教戒 莫謂我涅槃
淨行者無護 我今說戒經 亦善說毗尼
我雖般涅槃 當視如世尊 此經久住世
佛法得熾盛 以是熾盛故 得入於涅槃
若不持此戒 如所應布薩 喻如日沒時
世界皆闇冥 當護持此戒 如犍牛愛尾
和合一處坐 如佛之所說 我已說戒經
衆僧布薩竟 我今說戒經 所說諸功德
施一切衆生 皆共成佛道
斯文即法護尊者所撰爲廣略二教攝持通也今余所注述而不作將用塵露山海昭揚遠代同力所存固其爾矣
四分律比丘含注戒本下
傳頌年實由
慶安四十八年三卷修復之年
三子俱得法同修

②成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌

不空訳（著とも） 唐大曆八年（773） 一卷

京都大学附属図書館 谷村文庫二123ニシ7貴 一卷（巻尾欠）
平安後期写か 卷子装 楮紙（黄檗染） 後補表紙（五色縞地華卉文様）、後補軸・紐 巻首「信」単廓方形朱印、同「大行／満印」単廓方形朱印、同・波文様円形朱印、本文三行目中央「高山寺」朱印、巻尾「願瑜／珞符」単廓方形朱印、同「大行／満印」単廓方形朱印 縦二六・〇×横五一・四 一紙二六行、一行一七字 墨界高二〇・九 糴、界幅二・〇 糴 全二三紙 外題無し、内題「成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌」、尾題欠 奥書等無し

朱点（仮名、ヲコト点（円堂点・平安時代・巻頭の偈の部分のみ））、墨点（校合）、白点跡有るか

付属資料（明治期・一紙）あり

本書は、法華經二十八品の要旨をそれぞれ四句ずつの偈として説き、続けて法華經の供養法の作法を説いたものである。

外箱があり、「傳曰桓武天皇宸翰 古經堂徹定ヨリ大行満願二傳タルモノ／成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌 壹卷」と書かれている。本書には、「異字引証」と題された一紙（養鸕徹定筆か）が付属している。その欄外にある本書についての覚書によると、元は東寺藏本であつたらしく、その前半の八割を購入したという。

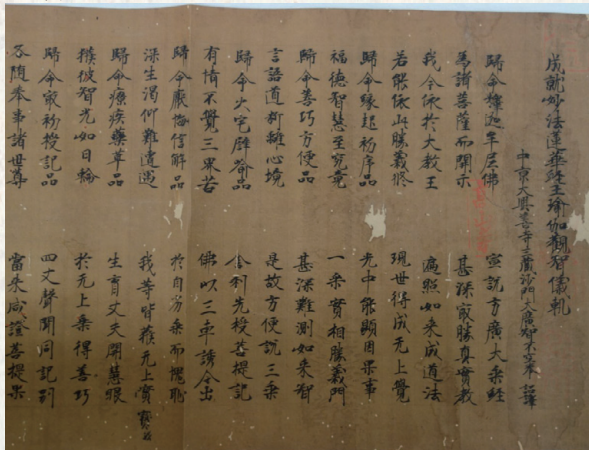
本書の巻頭の「信」印は養鸕（古經堂）徹定のもので、「大行満」は願海の印である。願海は幕末の僧であり、一時期高山寺近くに滞在していた。その際の手記が現存しており（『願海書志』）、そこに本書を徹定より譲り受けた際の記録がある。願海は「弥勒慈氏大士ノ銅像」を徹定に贈り、本書を得た。願海によれば、「傳へ云フ、桓武天皇ノ宸翰ナリト、其ノ行墨用筆、

湖東蘆浦觀音寺藏、宸筆法華經ト、毫モタゴウコトナシ」（六九ウ）という。本書は巻尾を欠くため奥書などを見ることはできない。「傳曰桓武天皇宸翰」とあるが、本文の書風からは、時代の下った平安後期頃の書写かと思われる。本書には高山寺印があるが、三行目中央という中途半端な位置にあり、元は東寺藏本であつたという情報も考慮すると、願海が高山寺に寄贈したものと考えるべきであろう。

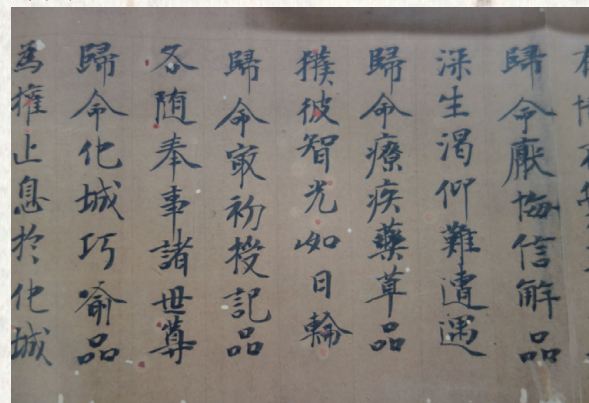
本書の本文を大正藏と比較すると、底本である高麗大藏經本ではなく、「甲」として校異が採られている空海『三十帖策子』（第十帖）に合致する箇所が多い。また、偈には大正藏の本文や校異にも見られない行が二行ある。その二行には法華經二十八品の十二番目「提婆達多品」が含まれており、これは『仏書解説大辞典』では「法華經の二十七品が掲げられ……第十二提婆達多品が除かれてある」とされる、欠けた本文であると考えられる。また、大正藏内でこの二行と合致するのは、「別行」（No.2476、永久五年（1117）、寛助）の「成就…儀軌」を引用した箇所のみである。すなわち、本書の本文は、古い形の本文を伝えたものだと考えられるのである。

（小林 雄二）

巻首



本文



③佛説八關齋經

京都大学図書館機構Webサイトの
貴重資料画像ページ
にてデジタル画像を公開

沮渠京声訳（劉宋） 孝建二年（455） 訳出 一卷
京都大学附属図書館 谷村文庫二123三ハ1貴 一帖 紹興三〇年
跋刊（南宋1160） 折本 麻紙 後補表紙 卷首「高山寺」朱
印、卷首「秋邨遺愛」朱印 縦二九、四×横一一・六糎 本文五行
十五字、跋六行十九字 無辺、無界 十三折 陰刻（宋拓力） 尾
題「佛説八關齋經」 跋文アリ

在家信者が特に身を慎むべきとされる日を六斎日といい、その日には不殺生、不偷盜、不淫、不妄語、不飲酒、化粧をせず歌舞に接しない、高くゆったりとした床で寝ない、午後は食事をしないといった八斎戒を守るべきとされる。八關齋經はその八斎戒の内容と、それを守ることに由る功德の大きさを説いた經典である。漢訳者は、本帖巻首には「景聲」とあるが、正しくは中国南北朝時代の僧・沮渠京声である。沮渠京声は本經典のほかにも觀弥勒菩薩上生兜率天經や淨飯王般涅槃經、諫王經等多くの經典を漢訳したことで知られる高僧である。

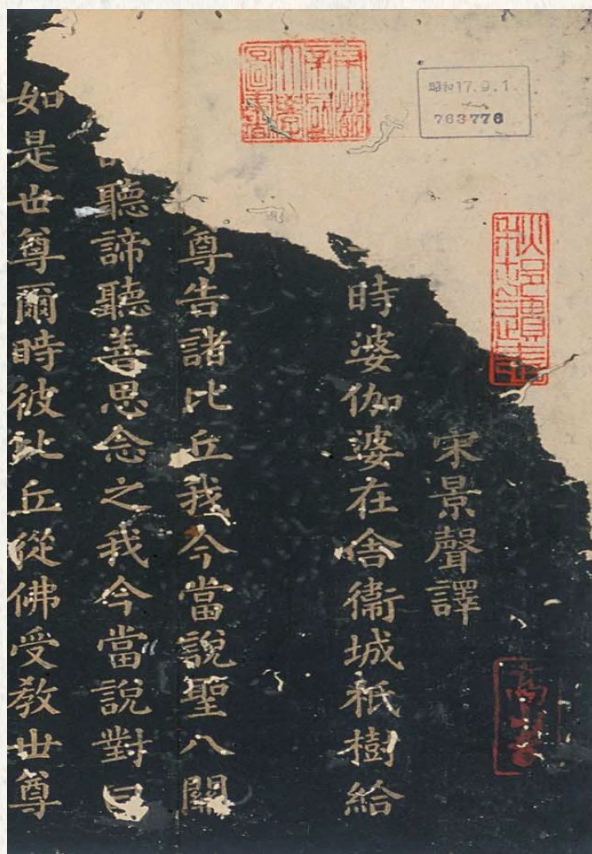
宋代に出版された書籍を宋版と呼ぶが、普通宋版は文字の部分が墨で黒くなる、いわゆる陽刻である（④『梵網經盧舍那佛説心地法門品菩薩戒本』参照）。一方本帖は、文字の部分は紙のままの色であり、その他の部分が黒くなっている、陰刻である。これは、文字が刻まれた石に紙を貼り付け、その上から墨を摺り付けて写し取ったことによるものである。このようにして写し取られた本を拓本と呼び、特に宋代に作られた拓本を宋拓と呼ぶ。拓本自体は中国では古くから作られてきたが、特に宋代以降流行する。しかしその用途は、本帖のような經典としてよりも、書の鑑賞用・手本用としてであ

る。それは、整版では板木に文字を左右反転させて彫らなければならないのに対して、拓印では石に文字を本来の向きのまま彫ることができ、整版よりも書としての筆勢を保つことができるためである。本帖の拓印の元となった石刻は宋代の舜臣の発願により作られたことが跋に見える。ただし石刻が作られたのが宋代であっても、本文が石刻から本帖に写し取られたのが宋代であるかどうかの判断は難しい。

巻尾には「右宋版佛説八關齋經一帖高山寺舊藏（中略）田中光顕誌」とあり、本帖が高山寺を出てから谷村一太郎の手に渡る前に、明治維新後の新政府において要職を歴任した田中光顕に所蔵されていたことが分かる。高山寺には現在でも多くの宋版が所蔵されているが、宋拓と見られる蔵書は『高山寺経藏典籍文書目録』によると『清涼國師十願文』の一点しか確認できない。同じく宋代に作られた石刻による拓本である本帖の資料的価値は高いといえよう。

（岡村 弘樹）

巻首



④梵網經盧舍那仏説心地法門品菩薩戒本

鳩摩羅什訳 二巻

京都大学附属図書館 谷村文庫 123二ホ二1貴 一帖 折本装
竹紙 表紙後補 巻首（扉絵の部分と巻序の部分、二箇所）・巻尾
「高山寺」朱印、表紙見返「秋邨遺愛」朱印 縦三一・二×横一
三・〇糎 五行一二字 上下単辺 全八六折 北宋版 外題「梵網經盧
舎那仏説心地法門品菩薩戒本 後秦三蔵法師鳩摩羅什訳」（一二
才）、尾題「梵網經菩薩心地戒本巻下」
補修奥書（裏表紙）「文政十年丁亥六月修補竟沙門慧友護誌（年五
十三）」（朱）
朱点（句読、合点、頭点など） 角筆点（仮名、句読、返点、合
符）

仏教の修行上の規則を「戒」という。『梵網經』（梵網經盧舍那仏説菩薩
心地戒品第十）は大乗仏教の実践面の中心である菩薩戒を説いた根本經典で
ある。

本書は『梵網經』の中心をなす下巻部分の古版本であり、京都大学所蔵高
山寺本の中の白眉であろう（図1・2）。見事な扉絵があり、宋版としても
古い。北宋版であろう。「敬」字などに欠筆が見られる（図3）。欠筆とは、
長上者の諱と同一の文字を使うことを避け、文字の一部を略すことである。
北宋の太祖趙匡胤の祖父の名が「敬」であるため、「敬」字を欠筆としてい
る。

また、あまり密ではないが、角筆によって加えられた訓点（仮名、句読、
返点、合符）がある。たとえば、「鉄錐」に「テツスイ」、「聴」に「キ」
などに見える。

図1 『梵網經盧舍那仏説心地法門品菩薩戒本』
扉絵部分



『高山寺聖教目録』に

梵網經戒本一卷（第二十四〔甲／＼〕）

梵網經戒本一卷（第七十四〔乙／＼〕）

とあり、現高山寺経蔵に同本を見出すことができないので、どちらかが京大
所蔵本に該当すると思われる（京大本は表紙を改めてしまっているため、表
紙に書き込まれていたであろう箱番号を確認できない）。

補修奥書（図4）に名が見える慧友僧護（1775・1853）は高山寺
十無盡院第二十二代。安永四年伊賀国上野に生まれ、智積院主謙順僧正につ
いて得度し、1801年、二十七才で高山寺報恩院に移錫した。1807
年、三尊院に移住し、山務となり、十無盡院主を兼ねた。嘉永六年、慧友が
七十九歳で寂したのも高山寺十無盡院においてである。慧友は高山寺におい
て経蔵典籍の整理・修復に心を砕いた。経蔵資料には慧友による多くの書き
入れを見ることができる。

（大槻 信）

図3 『梵網經盧舍那仏説心地法門品菩薩戒本』
欠筆部分



図2 『梵網經盧舍那仏説心地法門品菩薩戒本』
卷首部分

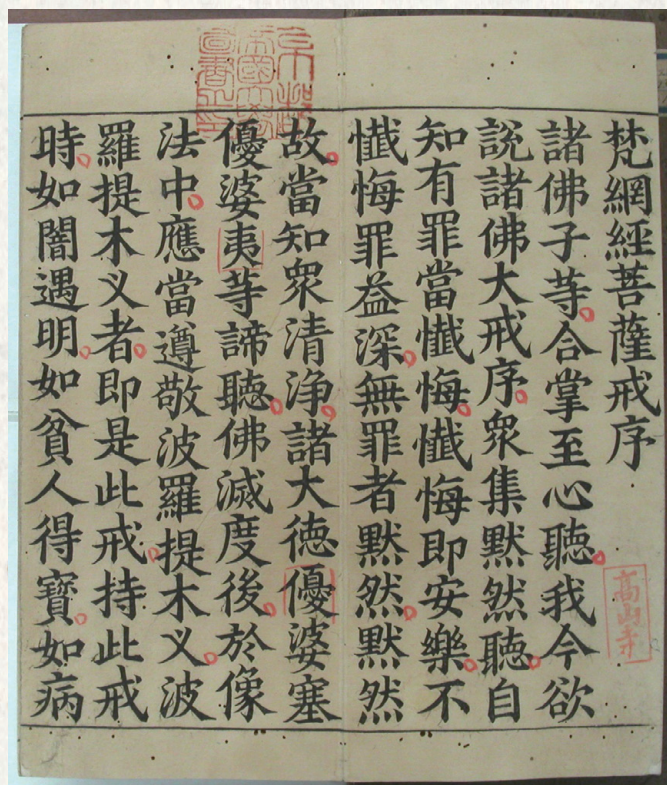
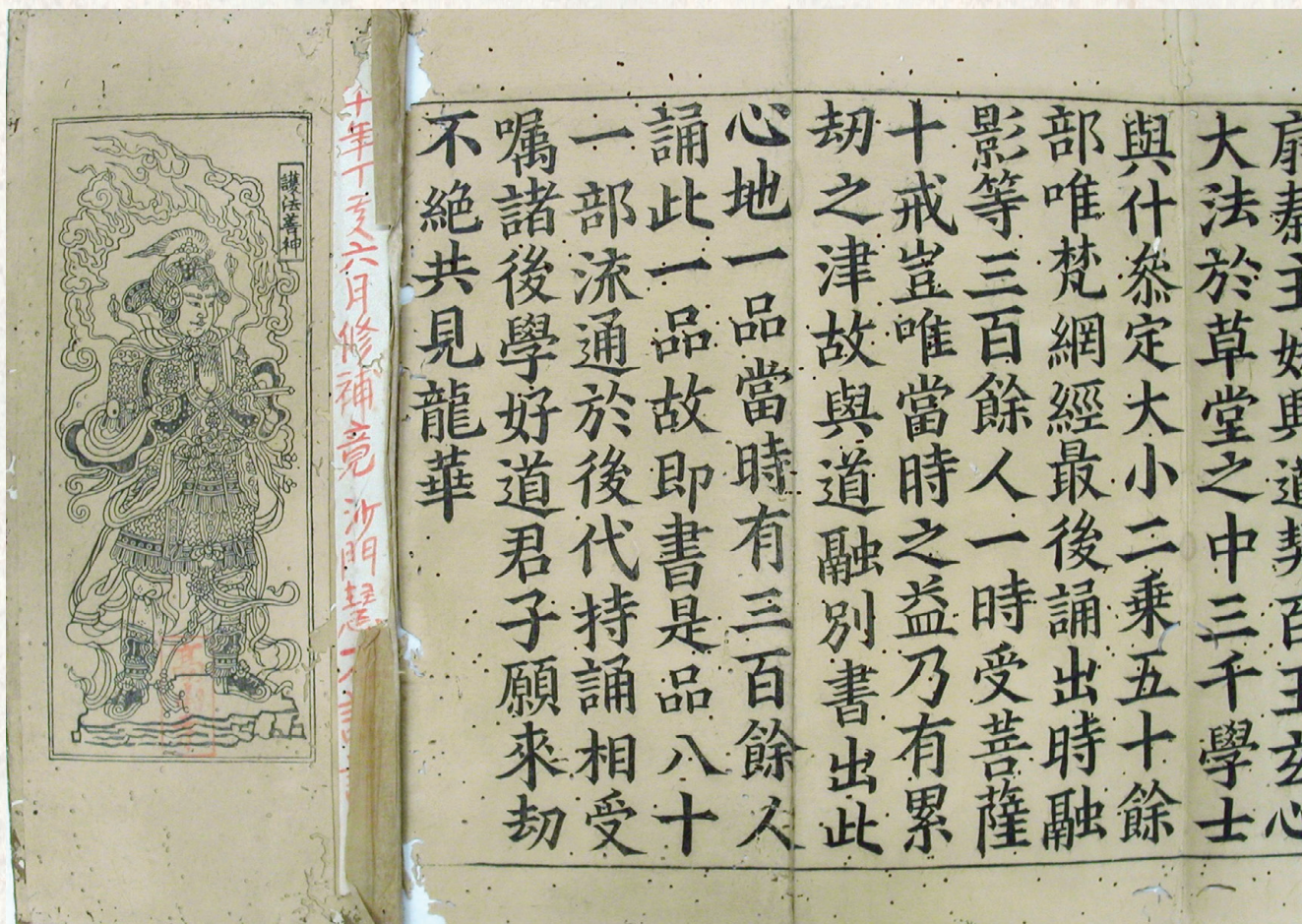


図4 卷尾の慧友奥書



⑤曼荼羅次第法（高尾口決）

空海述・真済記 天長年間（824・833）成立 一卷

京都大学附属図書館 谷村文庫二126ニマ1貴 一帖 鎌倉時代初期
建久四年（1193）写 枳形粘葉装 楮紙打紙 原装檜皮色無地表紙
表紙左肩浅葱色原題箋「高尾」、表紙右肩「臺第卅」打付書、同「百八
十二號」貼紙 表紙見返「秋邨遺愛」朱印、巻首「高山寺」朱印 縦
一八・一×横一五・一 一糎 片面八行、一行一三字 押界 界高一四・五
糎、界幅一・八糎 墨付三五丁 内題欠 尾題なし

奥書「戈本（云）／依弘法大師口決（梵字四文字）記之／真筆草本在花
藏院経蔵へ云々」／以三月三日始 庵會伽那姿蘊泥薩婆訶／已上裏書之
文也」「建久四季十月十日午時許於神護／寺以理明房闍梨之本書之了／
一交了 高尾本」「写本記云／此文両三本集所比交其以文字極／狼藉也
猶相尋古本可比交へ云々」以上同筆

朱点・墨点（校合）、ヲコト点なし

本書は空海の『性霊集』の編者として著名な真済（800・860）が、
天長年間（824・833）に空海より受けた口訣を記したものである。真
済は天長年間より神護寺で修行し、承和七年（840）に神護寺別当となっ
た僧である。

本書には外箱があり、「高山寺本／曼荼羅次第法」と墨書されている。こ
れは、本文二行目の行頭にある「曼荼羅次第法」を内題と考えたもので、谷
村文庫目録もこれを書名とする。しかし、これは一行目の文の続き（「以天
長七年十一月十五日成時始承曼荼羅次第法」）である。本書には同内容の書
が高山寺に現存し（仁安二年（1167）、範果写本、重文第一部一六三
号）、それを底本として大正蔵にも収録されている（No.2466）。高山寺

蔵本にも内題はなく、外題は「高尾」である。大正蔵では書名を「高雄口
訣」とする。

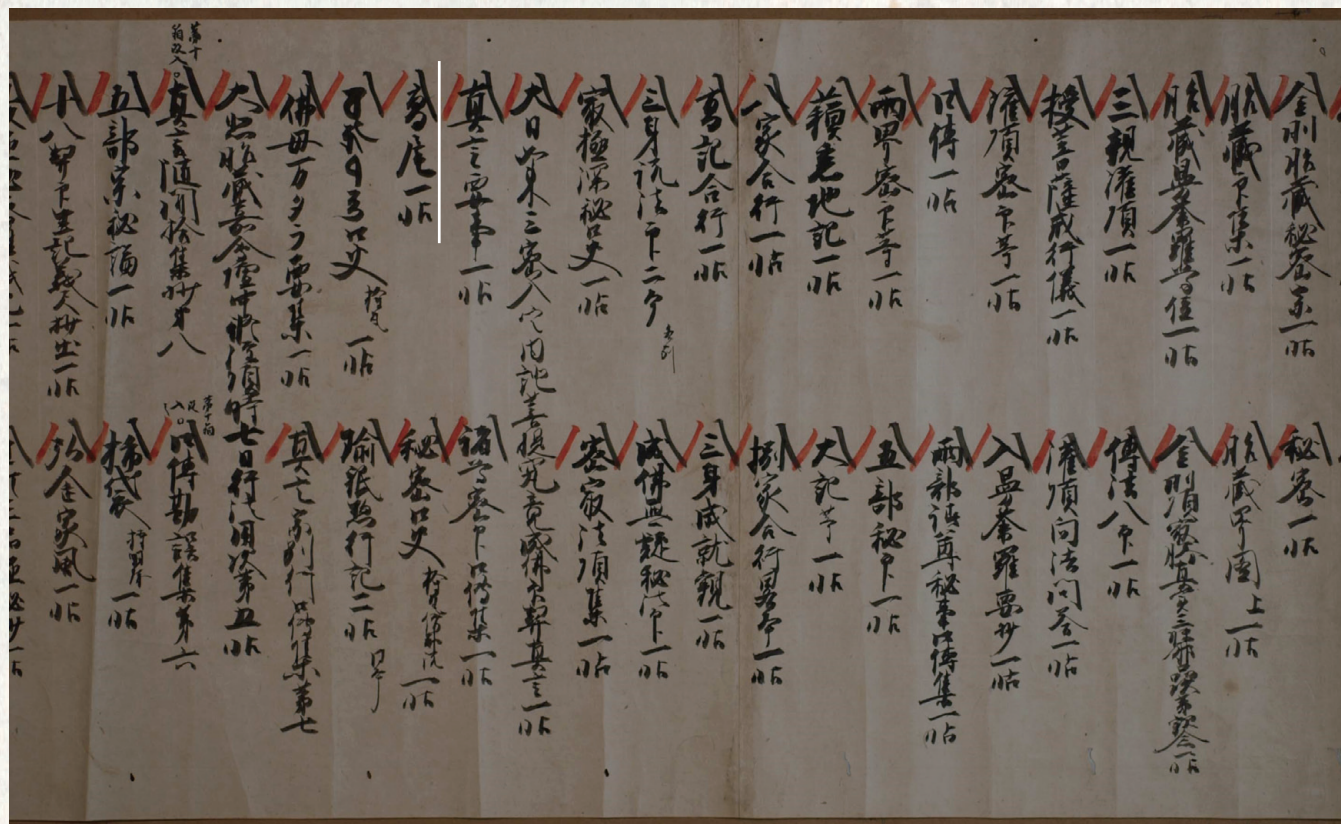
本書は二・三人の寄合書であり、書写者は未詳である。本書の奥書には、
「建久四季十月十日午時許於神護／寺以理明房闍梨之本書之了／一交了 高
尾本」とあり、神護寺で建久四年（1193）に書写されたことが分かる。
この時期は明恵が高山寺を後鳥羽院より賜る以前の、神護寺で修行していた
時期である。

本書は虫損が甚大であり、閲覧停止となっていたが、2012年度に補修
された。原装表紙が残っており、表紙右肩に「臺第卅」とある。これは、寛
永期に行われた経蔵整理によって書き込まれた整理記号である。寛永期の整
理では、石水院の経蔵に集められた聖教に、高山寺の過去の目録に従って整
理記号を書き込んだ。「臺」は法鼓臺を、「第卅」は第三十函を表す。これ
を『法鼓臺聖教目録』で確認すると、第卅（函）に「高尾一帖」とある（図
1）。これは外題箋の「高尾」と合致し、「帖」という数え方も、冊子体で
ある本書の形態に合致する。このことから、寛永期には本書が確かに高山寺
に存在したことが分かる。

本文は漢文で書かれているが、わずかながら仮名を用いて宣命書風に語尾
を補う箇所がある。用いられる仮名には万葉仮名、草仮名、片仮名があり、
しかも「我亦転法輪と念誦真言」「三波羅佉多者平等食止るッ」「名者生天有
テ三月目曾字者名置」のように交用される箇所もある。このような書き分けを
建久当時の書写者が意識的に行うことは考えられず、原本の仮名をそのまま
写したものだと考えられる。また、本書は奥書に「写本記云／此文両三本集
所比交」とあるように、何種類かの異本を用いた校合注記がある。そのよう
な原本に近づく手掛かりを残す点で本書には価値があると言えよう。

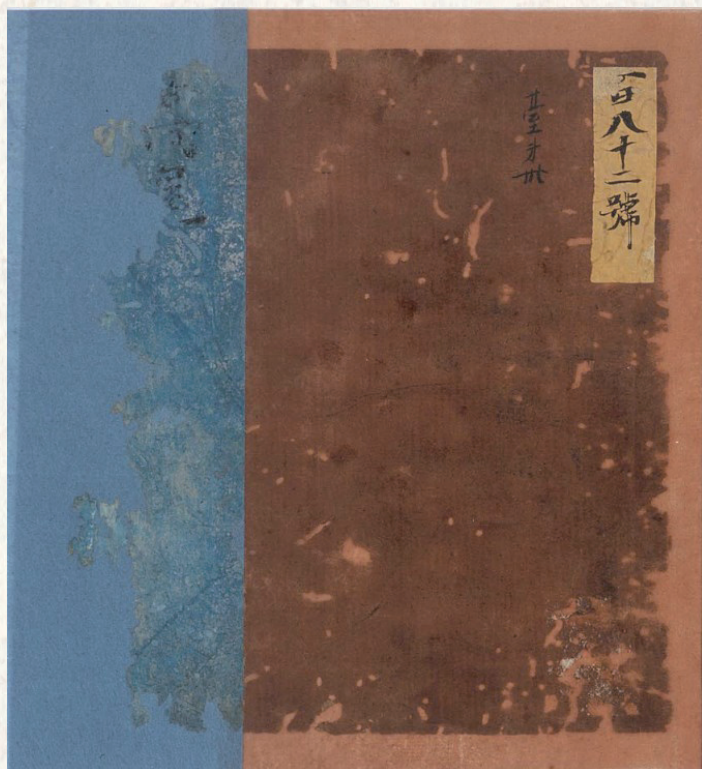
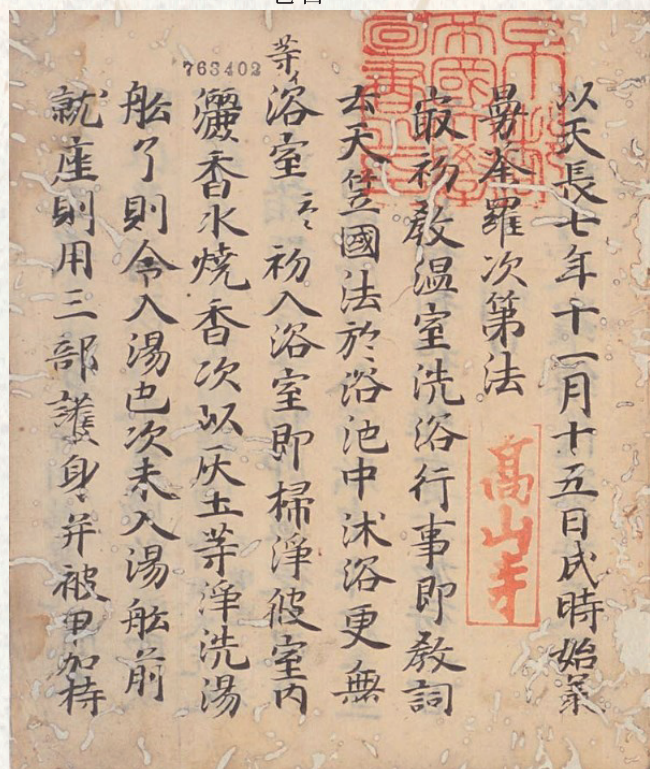
図1 『法鼓臺聖教目録』（高山寺典籍文書綜合調査団撮影）

上段に「高尾一帖」とある。



巻首

表紙



⑥ 薬字抄（香字抄）

十二世紀後半に丹波家において編まれたものか 三巻か

京都大学附属図書館 702ニヤニ一貴別 一卷（巻三） 院政
期写 卷子本 首わずかに欠 巻首紙背に朱で「真第九箱」とあ
る 楮紙 後補表紙 巻首「高山寺」 単廓長方朱印 墨界（十七
紙以降界線ナシ） 縦二九 六×横五三 二糶 二五行（第二
紙） 界高二五 五糶 界幅二 二糶 全二五紙 外題「真第九
箱／薬字抄 高山寺」 上下裁ち落としあり
奥書（朱・別筆）「永萬二年九月九日丹波抄五巻之内也」

内題・尾題を欠き、外題に「薬字抄」とあるが、内容は各種の香について、その性質、効能、産地、採取の時季、用法などを記載した本草系の類書である。僚巻の巻一（大東急記念文庫蔵）の外題に「香字抄」とあることから、『香字抄』巻三と認められている。同系の書に、本書を整理してなった石山寺本（外題『香薬字抄』、三巻、院政期写）、改訂を加えた二巻本の猪熊本（杏雨書屋現蔵）・続群書類従本がある。

平安時代中期以降、俗家における薫物、修法の盛行に伴い、また仏家では勤行、法会に香が使用され、護摩の料となることから、香に関する知識が必要とされた。その様な背景の中、一般的な本草書に飽きたらず、香薬の専書が求められたものである。本書『香字抄』、『薬字抄』（逸書）などが早く成立し、続いて『香要抄』、『薬種抄』、『香薬抄』などが編まれた。

記述は『開宝重訂本草』（李昉等撰、開宝七年（974）刊）を中心に、諸書からの引用がある（中には孫引きもある）。平安時代に広く学ばれた中国の本草書は『新修本草』（659年成立）であったが、平安も後期に至

ると宋で編まれた本草書が舶載される。それらは『新修本草』を増補した刊本（印刷本）であった。本書『香字抄』は宋本草を日本で最も早く利用した例として知られる。

「茅香」「芽香」「百和香」のように項を立てるが、特定の香に関する記事だけでなく、それに関係する事項も広く引く。引用書名には、『本草』『本草抄』『本草和名』のような本草書、『玉篇（原本系）』『翰苑』『初学記』『漢語抄』『和名・順和名（倭名類聚抄）』のような辞書・類書、『毛詩』『西域記』『大日經疏』のような内外典の他、詩賦の類もある（『紀納言賦萱詩』など）。中に『玉篇（原本系）』、『翰苑』のような逸書も見え、佚文として貴重である。

本草和名・倭名類聚抄等の引用に伴い、万葉仮名の和訓が引かれることがある。和訓の中に圈点によりアクセントが示されているものがある。これは引用原典にすでに付されていたものか、撰者、書写者が新たに付したものか判然としない。

巻首紙背及び外題に見える「真第九箱」は『高山寺経藏聖教内真言書目録』の箱番号を示す。大東急記念文庫本の巻一には「真第十一箱」とある。寛永年間に行われたと推測される箱番号の記入には一部錯誤があったらしく、鎌倉時代写の『真言書目録』（高山寺・重文第一部二四七号）では「真第十一箱」に「香薬抄三巻」と見えるのみである。寛永十年（1633）写の同目録（高山寺・重文第一部一九三号八）には「二巻欠」とあるから、その時点ですでに巻二を欠いていたと思われる。

奥書（朱・別筆）に見える「丹波抄」の丹波家は『医心方』を著した丹波康頼（912-995）以来、医薬の家として知られ、この書も「丹波抄」と呼ばれることがあったことがわかる。また、「五巻之内」とあることから、うち三巻が『香字抄』、二巻が『薬字抄』に相当すると推定される。

「丹波抄」の名は『禅上房書籍欠目録』（高山寺・重文第一部二四八号、鎌倉時代中期写）の第四六箱にも見える。

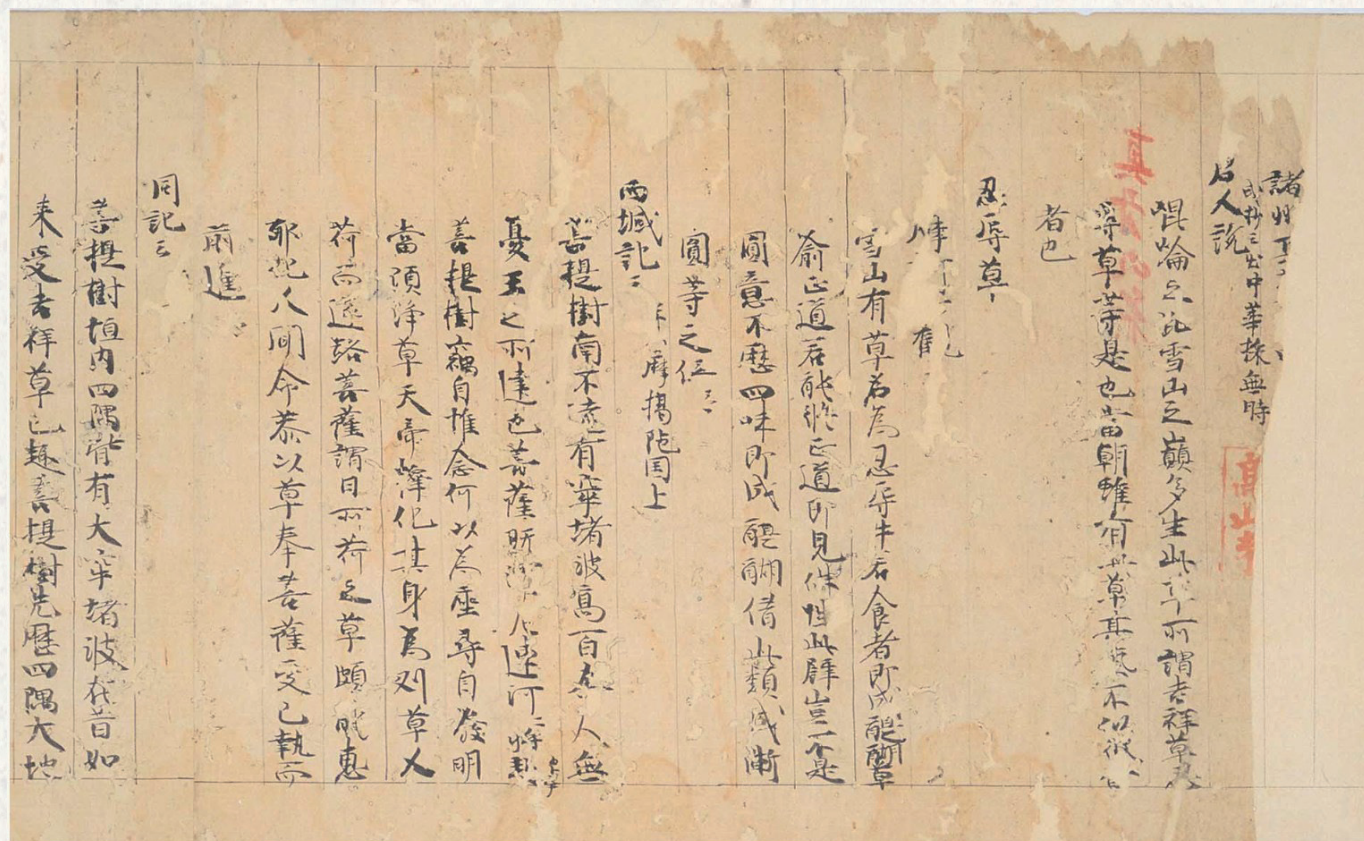
丹波抄五巻 丹波宿祢以来之抄也今為類聚（「類聚」を高山寺資料叢書『続高山寺経蔵古目録』は「乱翰」と翻刻する）加新注也（右に朱で「信西入道」とある）／本云永万二年九月以相公入道之本更補欠了／香抄二―葉抄三―合為五帖 東寺沙門勝賢

この目録は明恵晩年の弟子である禅上房が所持していた書籍の内、何らかの理由で欠失したものの一覧である（ただし、右に引いた該当部分は別筆後補のようである）。したがって、「丹波抄五巻」は現存しない。右は目録などに摘記されていた丹波抄写本の奥書を転記したものである。香抄二―とあるが、現存諸本、分量から考えて、「香抄」三帖・「葉抄」二帖の誤記と考えられる。右の記述は『香字抄』の成立と伝写の経緯について、また、本書（高山寺旧蔵本）の奥書の意味について考えさせる。記述を信じれば、丹波宿祢康頼以来、代々書き継がれた香葉の書があった。その集成は名医として知られる丹波雅忠（1021-88）などが想定できる。それを信西（相公）入道藤原通憲（1106-59）が類聚し、新しい注を加えた。通憲の息である勝賢が永萬二年（1166）にその欠をさらに補ってできたものが丹波抄であるということになる。丹波家の家説を基礎としながらも、丹波抄の最終的な形態には通憲の関与が深いことになる。

本資料は、その重要性に鑑み、大正新修大蔵経图像部（第十一巻）に採られ、また貴重図書影本刊行会による原装の複製がある。

（大槻 信）

巻首部分



⑦大乘華嚴經略策 附入法界十八問答、華嚴講主自問自答

大乘華嚴經略策 澄觀(唐・738-839)述 一卷

京都大学人文科学研究所 松本文庫 松本1932 一帖 鎌倉時代中期写 折本装 楮紙 表紙後補 紙背首「高山寺」朱印 縦三〇・〇×横一一・二糎 七行二三字前後 天地墨界(表のみ。界高二六・八糎) 全四〇折 首欠 尾題「大乘華嚴經略策 一卷」 小口書「要義集」

墨点(仮名、返点) 朱点(合点など) 墨・薄墨(校合)

明恵の教学は華嚴を基礎とし、華嚴と真言密教を融合した嚴密ごんみつと呼ばれる独自の宗教観を打ち立てた。高山寺の学問の中心の一つは『華嚴經』である。高山寺という寺名も『華嚴經』の譬喩に由来している。

本書は、『華嚴經』に関する問答形式の注釈三種を、紙の表裏両面に連続して書写したものである。小口書に「要義集」とあるように、修学のためのノートという趣が強い。本来の巻首部分が失われており、「高山寺」朱印が捺されているのは、もとの裏面のはじめの部分である。

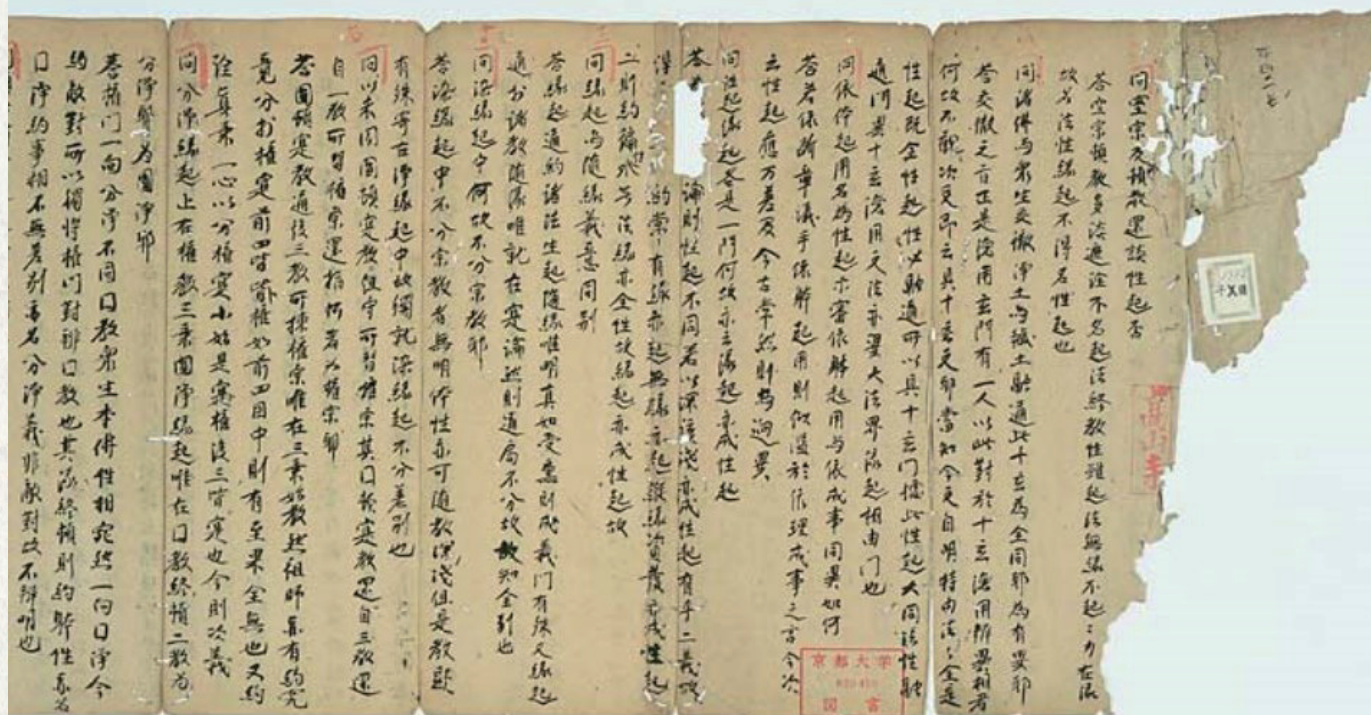
はじめに置かれる『大華嚴經略策』は澄觀(738-839、華嚴宗第四祖)の述(大正蔵No.1737)。「大方広仏華嚴經」(八十華嚴・新訳華嚴經)の注釈書であり、四十二条の問答形式をとる。この『略策』は、同じく澄觀の著した『大方広仏華嚴經隨疏演義鈔』の要点を略述したものである。首欠のため、現状では、「方知綱要謹対／第五不起昇天／問去住不同人天処別如何經說不起覺樹而昇三天又許不起」以下が残されている(第一から第四を欠くのみなので、失われた巻首部分はわずかであろう)。四十二条まで列記され、末尾に「大乘華嚴經略策 一卷」とある。その後、「再辨十二部經

即前別本也」で始まり「大方広仏華嚴經四十二問答畢」で終わる、『略策』の別本テキストが写されるが、墨で大きく×を加え見消となっている(次葉写真参照)。

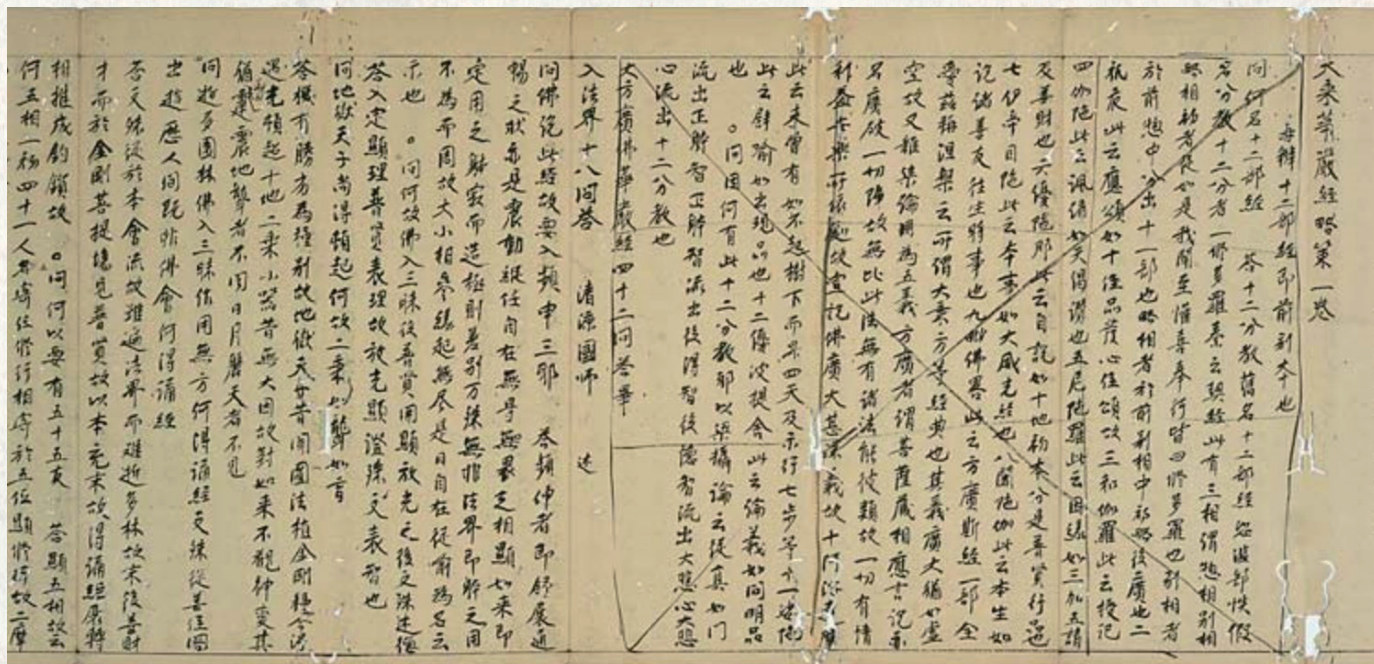
次に、「入法界十八問答 清涼国師 述」とあり、同じく澄觀の『入法界十八問答』(続蔵経No.218)を続いて書写している。十八種の問答の後、空行一行をはさんで「華嚴講主自問自答」とあり、朱の数字書き入れに従うと二十三種の問答が並ぶ(カギ型の朱の合点の上に、番号が記入されている)。その後も問答は続き、中に「探玄」(『華嚴經探玄記』)、「大疏」(『大方広仏華嚴經疏』)など、『華嚴經』の注釈書類からの比較的長い引用が見える。もとの巻首が失われているのに伴い、紙背の末尾も失われ、奥書等はない。高山寺印のある部分は、朱の書き入れ「八」からはじまっているが、この「華嚴講主自問自答」の八番目以降が裏面に書写されているのである。(高山寺印の前にある素紙に、上下逆に「第一百五」とあるが、何を意味するか不明である。『高山寺聖教目録』の「第一百五」箱には『華嚴經』本經があがるのみ。『略策』の名は同目録の第十八、第八十一に見える。)

(大槻 信)

もとの裏面のはじめの部分



もとの表面の『大乘華嚴經略策』末尾部分



画像出典：東アジア人文情報学研究センター（京都大学人文科学研究所分館）の『東方学デジタル図書館』

松本文庫『大乘華嚴經略策』一巻 入法界十八問答一巻 華嚴講主自問自答一巻』

裏 (<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/M0430001.html>)

表 (<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/M0430002.html>)

⑧三部經傳受聞書

京都大学文学研究科図書館 国文学三寿岳文庫二7C4 一冊 室町時代応仁二年(1468)写 袋綴 楮紙 原表紙と後補表紙 原表紙右下「寿岳」朱印(円形帆船印) 無界 縦二四・五×横一五・九 九行 五七丁 漢字片仮名交り文 原表紙「三部經傳受聞書」(左上打付書)「四九九四」(右上貼紙) 後補表紙「三部經傳受聞書」(左上)「四九九四」(右上) 卷首「梅尾／善財院」内題「三部經傳受聞書」内題下「應永十八年九月十一日三部經傳授始／傳受師宥快 全宥口筆 以草本寫了」

奥書「御本云／為佛法紹隆功德法證明馳筆了／口筆之本間可多誤／以写本交了」／嘉吉二年(壬戌)五月十四日南山籠居時／金剛資空賢(春秋／卅□)／西院於善集院閑窓写畢／向井威徳院空賢法印賜御本写畢是併為滅罪／生善仏果證徳也乃至法界有縁無縁利益拔濟耳／應仁二年(戊子)九月七日於堺大少路傍小家筆功終了／金剛資快算(春秋／五十二)」

奥書(別筆)「文明十七年 壬三月九日於泉堺小家買／取之矣 於播州書寫山之坂本旅宿加一覽／畢／西山高山寺住侶竺譽」

墨点(返点、声点(圈点)、合点) 朱点(句切点、頭点)

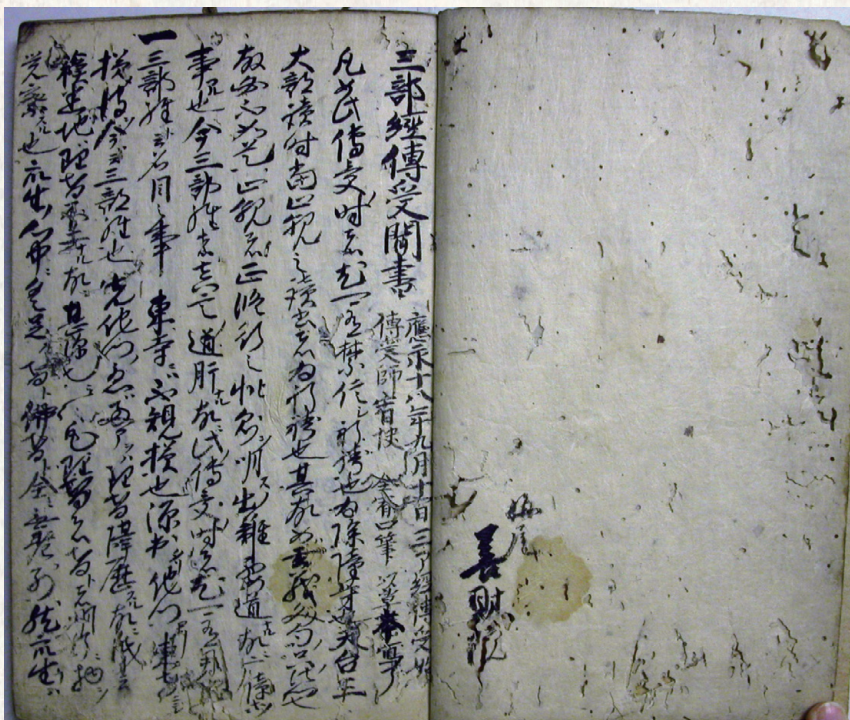
本書は寿岳章子が京都大学に寄贈した、抄物を中心としたコレクシヨンのうちの一つである。内題の下には、応永十八年(1411)に高野山の僧である宥快から全宥へと伝授があった旨が記されている。また、巻首に見える善財院は高山寺の子院の一つ(江戸時代中期に焼失)で、本書が善財院第八代の竺譽(1452・1517)によつて買い取られたものであることが別筆の奥書より分かる。

書名の三部經とは、ここでは真言宗において特に重要とされる大日經・蘇

悉地經・金剛頂經の三經典を指す。本書は三部經全体の名目や伝来について触れた後に、各經典に見られる語の解釈や漢字音・梵字の読み方などについて説いている。本書に見られる声点は、漢字の四隅に付けて四声を示したり、圈点を二つ横に並べて濁音を示したりするほか、漢字音を表す片仮名の左上か左下かに分けて付けることで高低アクセントを示したのも見られる。また、「イカメシケナル佛身也」「月輪ノ光リチロリト見ル」「愚ナル者ヲハ犬ノ根ナル者ト云フ」など日本語の歴史的研究にとつて興味深い表現が散見される。

(岡村 弘樹)

巻首



⑨高山寺図像鈔目録

京都大学図書館機構Webサイトの貴重資料画像ページにてデジタル画像を公開

京都大学附属図書館 12033 貴 一冊 江戸時代中期写
袋綴 楮紙（版本『止観私記』の紙背） 茶色原表紙 巻首「高山寺」朱印 無界 縦一八・六×横一三・二 糰 五行 三一丁
後補題簽「高山寺図像鈔目録 全」、背「高山寺図像鈔目録 全」
奥書「一交畢」

本書は、真言密教の二大流派である広沢流と小野流に係する事相聖教（実際の修法について説いた経典）の目録である。列挙されている書名の下には割注の形式で、その作者や編者に関する注が付されているのが散見される。そこに挙げられている人名には覚印や覚成といった仁和寺の僧、勝覚、実運、勝賢、源運といった醍醐寺の僧の名は見られるが、高山寺の僧の名は見られない。また、「予類聚之」「予以僧正説書之」といった注記も見られ、目録中の聖教の編纂に「予」が関与したことが分かる。この「予」とは仁和寺御室第六代であり醍醐寺の僧とも関わりの深い守覚法親王であると考えられる（後述の阿部泰郎氏解題による）。このことから本書は、題簽にあるような高山寺の蔵書に関する目録ではないといえよう。なお、目録中には「天等星宿壇図」「傳法灌頂内陣図」のように図像と呼ぶものも含まれてはいるものの、多くは聖教であるため、何故書名に「図像鈔」と付けられたかは不明である。

高山寺の蔵書印は鎌倉時代から近代に至るまで複数種作られてきたが、その多くのものの字体は後鳥羽上皇の宸筆か明恵の自筆を模したものとされる。しかし本書の巻首に見られる蔵書印の字体は図1の通り、一般的な楷書

体に近い。字配りも本来の高山寺印と比べると一字一字が広く空いているように見える。資料の価値を高めるために高山寺印の偽印が作られていたことが知られているが、本書の高山寺印も偽印である可能性が考えられよう。

なお、『真福寺善本叢刊』第二期第一巻に本書と同一内容の写本が見える。書名は『文車第二目録』。阿部泰郎氏の解題によると、守覚法親王が製作し組織化した御流の聖教群の目録である『密要鈔目録』がいわば「文車第一目録」と目されるのに対し、御流の下位に位置づけられる広沢・小野諸流の聖教目録であるため『文車第二目録』と呼ばれた。

本書と『文車第二目録』を対照すると、一つ一つの文言から合点の付け方まで両書はほとんど合致する。ただし本書は『文車第二目録』の三分の二ほどの分量で書写が中断されている。また、本書に見られる「未交」「中欠」といった別筆の朱の注記や朱の合点は『文車第二目録』には見られない。同じく朱で書かれた「懸子納」「同納」といった注記は『文車第二目録』にも見られるため、この朱書きが題簽と同様に勝手に書き加えられたものとは思われない。実際の蔵書管理に用いられた際の朱書きという可能性もあるが、本書が完本でないことが気になる。あるいは、本書と『文車第二目録』それぞれの書写の元となった本の違いによる差異であろうか。なお検討を要する。

（岡村 弘樹）

谷村文庫について

谷村文庫は、実業家、故谷村一太郎氏が収集した旧蔵書九千二百冊からなる。

谷村一太郎氏は明治四年（1871）富山県福光町の素封家に生まれ、東京に出て慶応義塾大学に入学、のちに早稲田大学に転じ同校を卒業した。帰郷してのち中越鉄道支配人となり、泉州紡績株式会社支配人を経て、明治三十九年藤本ビルブローカー証券会社に入社した。大正十四年には藤本ビルブローカー銀行会長に就任する等、実業界で活躍した。昭和十一年（1936）京都市にて六十六歳の多彩な生涯を閉じた。

谷村氏は実業界で活躍する一方で、『中島棕隠と越中』（書香会1932年）、『校註老松堂日本行録』（大洋社1933年）、『青陵遺編集』（國本出版社1935年）、『陰陽談・附青陵雜纂』（野村書店1935年）等を出版している。また、古典籍・文書類の収集家としても有名で、稀覯書の入手のためには千金を投じて悔いるところがあったと伝えられている。

谷村氏の収書の範囲は非常に幅広く、とりわけ和漢の古典籍に関して深い関心を寄せていたことから、谷村文庫には数多くの写本、刊本が含まれている。奈良、平安、鎌倉時代の写経類、室町時代の稀覯書のほ

か、春日版、高野版、慶長・元和の古活字版等があり、特に五山版は内容的にも豊富であるとされている。他に特筆すべき資料として、『永樂大典』巻12929（12930）、仙台藩猪苗代家旧蔵の連歌集書等が挙げられる。

これら谷村一太郎氏が収集した典籍・文書類は、広く学界に活用されることを願った亡父の遺志をついだ嗣子谷村順蔵氏により、氏と姻戚関係にある第三代館長新村出博士を通じて、昭和十七年（1942）に附属図書館に寄贈された。谷村文庫の資料には、谷村一太郎氏の雅号「秋邨」にちなみ、「秋邨遺愛」の蔵書印が故人の遺徳と芳志を記念して、押印されている。

谷村文庫には明治・大正期に刊行された資料も数多く含まれているが、昭和三十八年（1963）には同文庫のすべての資料を収録した『京都大学谷村文庫目録』が刊行された。同文庫の目録については、本学の蔵書検索システムKULINEでも検索が可能である（KULINE書誌タイトル数3758件、うち特に貴重な資料367件）。一部の資料については、デジタル化をおこない、貴重資料画像としてインターネットで公開している。

（大西賢人）

「蔵書印」





貴重書修復について

京都大学図書館機構では、高額な費用が必要な修復事業のための学内経費を措置し、専門知識を持った教員と図書館員が協働し、長期的な視点で修復計画を策定している。従来の「部局に存在する個々の資料の修復」に加え、「部局を超えてテーマや資料形態によってグループ化した資料群の修復」という考えを取り入れ、「博物学」「文学」「社会科学」等のテーマ別に予算を振り分けている。

本稿では、平成二十五年度から二十六年度にかけて「仏典」のテーマのもとに修復した、人文科学研究所（以下、人文研）松本文庫の貴重書十点の修復状況を報告する。

松本文庫は、京都帝国大学文科大学にて印度哲学・仏教学等を講じ、東方文化研究所長を務めた松本文三郎（号亡羊）の旧蔵書の一部を、昭和二十五年三月に人文研の塚本善隆が文部省の助成によって購入し、同所に寄贈したものである。原典及び研究書が丹念に収集された、和書・漢籍・洋書あわせて一万冊を超える蔵書は、人文研の所蔵する宗教関係図書の中核をなしている。

今回修復した十点はいずれも宋元代の刊本で、折帖仕立ての仏典である。虫損が著しく、湿害による紙の変色・固着・文字の滲み・カビ等が

確認されたほか、糊の弱体化によりりしる部分が剥がれており、小口の破損による本紙の断裂も多く見られた。一度燻蒸が行われたものの、劣化が進行中で研究利用に耐えられない状態であり、人文研以外では寺院等の非公開機関あるいは限定公開機関にしか所蔵がない資料のため、修復を申請するに至った。

人文研への受入時に押印された「松本文庫」印のほか、一部の資料には松本の蔵書印である「亡羊書屋」印や、室町時代に押印されたと思われる茨城県「清音寺」印が見受けられる。虫損により大きく欠損した部分は一部裏打ちされており、裏打ち紙の上に「松本文庫」の印記があることから、人文研への受入以前の段階で裏打ちされていたことになる（図1）。一紙毎に大蔵経の整理番号である千字文が刷られているが、本紙裏や表紙に、対応する千字文が墨書されているものもあった（図2）。帙等はなく、書名が墨書された紙に一点ずつ包まれた状態で残っていた。これらの墨書が松本人の手によるものかは不明である。

今回の修復では、表裏表紙の新調、全丁の裏打ち、四方帙の作成を行った。

表紙については図2のように原表紙が残存しているものは修復し（図3）、新調する場合はそれに紙質を合わせた。

本紙の修復方法としては裏打ちや漉きはめ等が考えられるが、本紙が極めて薄かったため、裏打ちを採用した。特に欠損が大きい箇所のみ、紙の厚みを揃えて風合いを整えるため、繕いを併用した。

裏打ちにあたって脆弱な旧裏打ち紙は除去したが、旧裏打ち紙に印記がある場合は印記のみを切り取って新裏打ち紙へ貼り付け、旧裏打ち紙に文字の小片が付着しているものは旧裏打ち紙ごと別途保存した。

帙は、対象資料の価値や配架場所を考慮した上で、無双帙あるいは四方帙を採用するが、今回は貴重書であるため、埃が入らず持ち運ぶ際に資料への負担が少ない四方帙を採用した。

その他の留意事項として、のりしろ部分に情報が存在する場合があるため、修復の過程で剥がしたのりしろは見える状態で処置するか、あえて貼付しないでおく。今回は前者の方針により、のりしろの墨書が見える状態で処置した(図4)。

また、欠葉の箇所には白紙を挿入した。例えば「大毗婆沙論」巻八は一から十紙が欠けており十一紙から始まるため、冒頭に白紙を挿入した(図5)。なお、巻八は当初は巻数不明の断簡であつたが、大正新脩大藏経と本文を照合し巻八であると判明した。

さらに、文字の小片がある場合は、元の位置が分かれば貼り戻した。「瑜伽師地論」は巻五十二の十三紙の間に「是」という字の小片(図6)が挟まっていたが、これは同じ巻の七紙に貼り戻した。元の位置が不明な場合、小片は紙に包み、同じ帙に入れて保存した。

なお、発注にあたっては貴重書の修復実績のある業者を選び、修復前の画像データの納品を義務付けている。

(行友 三輪子)

図1 「大毗婆沙論」
巻十二

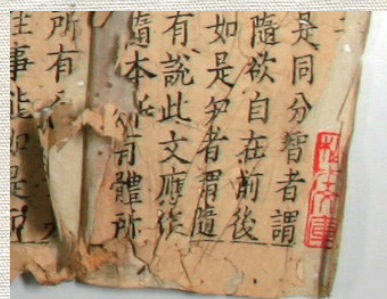


図2 「四分戒本」



図3 「四分戒本」



図4 「分別縁起初勝法
門經」裏



図5 「大毗婆沙論」
巻八

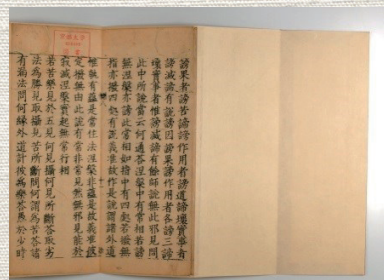
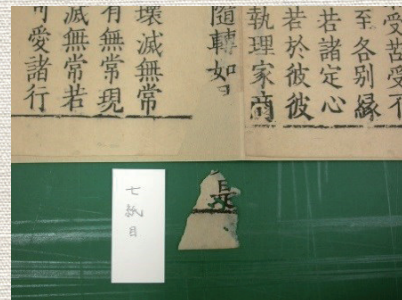


図6 「瑜伽師地論」
巻五十二



貴重資料修復事業による修復資料のうち「仏典」一覧

■平成二十三年度実施

古写経断簡「天平期」 附属図書館（谷村文庫） 一軸※
胎記下巻「平安後期」 附属図書館（谷村文庫） 一帖※

■平成二十四年度実施

曼荼羅次第法「鎌倉初期」 附属図書館（谷村文庫） 一帖※

■平成二十五年度実施

縁生初勝分法本經卷下「宋代」 人文科学研究所（松本文庫） 二帖
分別縁起初勝法門經卷上「宋代」 人文科学研究所（松本文庫） 一帖
一字佛頂輪王經卷第四「元代」 人文科学研究所（松本文庫） 一帖
金剛薩埵説頻那夜迦天成儀軌經卷第三「元代」 人文科学研究所（松本文庫） 一帖
佛説妙吉祥最勝根本大教經三卷「元代」 人文科学研究所（松本文庫） 一帖
四分戒本一卷「元代」 人文科学研究所（松本文庫） 一帖
大毗婆沙論卷第十二「元代」 人文科学研究所（松本文庫） 一帖
瑜伽師地論卷第九十一第一百「元代」 人文科学研究所（松本文庫） 一帖
瑜伽師地論卷第五十二第五十七「元代」 人文科学研究所（松本文庫） 一帖

■平成二十六年年度実施

攝大乘論釋卷第二「元代」 人文科学研究所（松本文庫） 一帖
法苑珠林卷第七十五「宋代」 附属図書館（谷村文庫） 一帖※
成唯識論卷第六「鎌倉中期」 附属図書館（谷村文庫） 一帖※
般若心経秘鍵「室町期」 附属図書館（二般貴重書） 一冊※

京都大学図書館機構による貴重資料修復事業では、平成二十三年度から二十六年度にかけて、テーマ「仏典」のほか、「博物学」「地図地理」「社会科学」「文学」「奈良絵本」の各テーマから、合計82点175（冊／軸枚）の資料を修復しています。

このうちには修復と併せて撮影を行い、京都大学図書館機構Webサイトの貴重資料画像ページにてデジタル画像を公開している資料もあります（上記「仏典」一覧中の「※」は画像有り）。

監修・解説 大槻 信（京都大学文学研究科教授）

解説 小林 雄一（京都大学文学部・非常勤講師）

岡村 弘樹（京都大学文学研究科・博士課程）

展示協力 西山 伸（京都大学文学部文書館教授）

貴重書公開展示ワーキング・グループ

赤澤 久弥（京都大学附属図書館情報サービス課課長補佐）

櫻井 待子（京都大学附属図書館情報サービス課参考調査掛長）

大西 賢人（京都大学附属図書館情報サービス課相互利用掛）

佐藤 りん（京都大学附属図書館情報管理課電子情報掛） 図録デザイン

田中 洸司（京都大学文学研究科図書掛）

行友 三輪子（京都大学人文科学研究所図書掛）

平成二十七年年度京都大学図書館機構貴重書公開展示

『ほんをつたえる――こうざんじほん高山寺本としゅうふく修復』

2015年10月23日発行

編集・発行 京都大学図書館機構

〒6068501 京都市左京区吉田本町

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

印刷 双林株式会社

この図書は平成二十七年年度京都大学図書館機構貴重書公開展示『本を伝える――高山寺本と修復』の図録として作成されました。

会期 2015年10月27日・11月8日

会場 京都大学百周年時計台記念館歴史展示室内企画展示室

平成27年

10月27日 火

11月8日

(11月2日①は休室)

入場無料

開室時間＝午前9時30分―午後5時
会場＝京都大学百周年時計台記念館

歴史展示室内企画展示室

主催＝京都大学図書館機構

お問合せ＝京都大学図書館機構

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

電話075-753-2613

URL: <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp>

